

『浅見

綱齋』

横井川 博之

江戸時代中期の朱子学者である浅見綱齋は、承応元年（一六五二）に高島郡太田村の医家に生まれました。

名は安正、通称は重次郎、号が綱齋です。この号は塾があった京都錦小路の「錦」と『中庸』の「錦を着ても、その輝きをやわらげるために、綱をまとう」の教えにならつて、晩年につけた自号です。

はじめは京都で医者をしていましたが二十四歳の頃に山崎闇齋の敬義塾に入門し、のちに佐藤直方、三宅尚齋とともに崎門三傑と称されました。



浅見綱齋 肖像

綱齋の門人

綱齋は徳川紀州藩などの招きを断り、生涯士官せず、「錦陌講堂」と名付けた私塾を開き、門人の教育に尽力しました。現在、大丸京都店の敷地の一角に京都市教育会によって「浅見綱齋邸址」の石碑が建てられています。



錦陌講堂跡 石碑

この塾で正徳元年（一七一）に六十歳で亡くなるまで、門人に教授し、その講義の内容は、弟子たちが記録した『師説』と称される筆記類に残されています。門人には若林強齋、三宅観瀾、山本復齋、谷秦山などがいます。綱齋は常に長刀を帯び、刀の金具には「赤心報国」の文字が刻まれていたとされています。

綱齋の著書『靖献遺言』

綱齋は貞享元年（一六八四）から、四年の歳月をかけて『靖献遺言』を編纂しました。靖献遺言には中国歴代の忠臣義士とされる屈

原、諸葛亮、陶淵明、顔真卿、文天祥、謝枋得、劉因、方孝儒の八名の人物の遺文とその略伝、論評が記されています。

この『靖献遺言』は当時の人々だけでなく、幕末には勤王志士の必読書として読まれ、明治維新に大きな影響を与えました。

幕末の志士の会合では、よく詩吟が歌われたとされ、特に『靖献遺言』の詩を吟じることが多かったとされています。西郷隆盛、高杉晋作もこれら八名の一人に自分を重ねて詩をつくっています。

『靖献遺言』が与えた影響

寺田屋事件にて命を落とした薩摩の有馬新七は『靖献遺言』を研究し、崎門学派の学を修めています。福井の橋本左内は外出の時に常に『靖献遺言』を懐中にしていたと伝えられるほか、梅田雲浜も交際のあった吉田松陰から「靖献遺言にて固めたる男」と評されています。雲浜は綱齋の同郷（高島郡北畑村）で崎門学を学んだ上原立齋に教えを請い、娘の信を妻にしています。

吉田松陰もまた「野山の獄」にあつて本書を熟読したことが『野山獄読書記』に記されています。

松陰は綱齋の「華夷弁別」の考えへ自分が生まれた土地に劣等感を抱

くのは無用で、その場で生きるための精進に励めばすなわちそこが「華」（世界の中心）であるを理念として、門人の教育にあたったとされています。

綱齋の顕彰

大正十三年に綱齋の故郷である新旭町太田に綱齋書院が完成。昭和五十一年には、京都市東区の鳥辺山墓地にある綱齋の墓所の修復。そして、昭和五十二年に綱齋書院保存会が発足。平成二十三年には、保存会により没三百年祭が開催されるなど、綱齋の功績が現在も継承されています。



浅見綱齋先生之墓